

# 春の女神 ギフチョウ

## 発見の歴史

ギフチョウは、黒と黄色のまだら模様を持つ美しいチョウです。江戸時代にはすでに「錦蝶」「だんだらちょう」という呼び名で絵に描かれていましたが、一般的にはあまり知られていませんでした。現在使われているギフチョウという和名は、名和靖氏が岐阜県で採集した標本を1889(明治22)年に動物学雑誌で報告した際に名づけられたものです。その後全国的に産地が報告され、足羽山はその中でも早い時期の1900(明治33)年に、鯖江市とともに福井県内で初の採集地の一つとして記録されました。



## 成虫

3月末ごろからオスが飛び始め、その後でメスが現れます。それぞれの成虫期間は2週間ほどで、美しい姿はこの時期のみ見られます。この短い期間に交尾をし、産卵します。交尾がすんだメスの腹部には「交尾のう」というふたがオスによってつけられ、それ以上の交尾を防いでいます。成虫はカタクリやスミレ、サクラなど早春の植物や園芸品種の花の蜜をエサとしています。



## 卵

幼虫のエサとなる植物(食草)であるカンアオイ類やウスバサイシン類の新葉の裏に産み付けられます。卵は3週間ほどで孵化して幼虫になります。



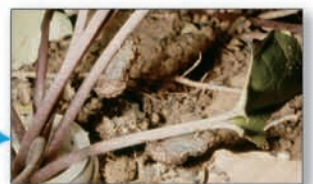
## 幼虫

食草を盛んに食べ、5齢幼虫まで脱皮を繰り返します。幼虫期間は2ヵ月ほどです。



## さなぎ

7月ごろにはさなぎになります。次の春まで9ヵ月以上をさなぎで過ごします。夏の高温時や冬の低温時は発育が停止し、休眠状態となります。3月になって気温が上昇すると、冬に一度停止していた成虫化が進み、例年4月をむかえるころに羽化が始まります。



## ギフチョウの保全

「春の女神」と呼ばれ愛されているギフチョウですが、その美しさを標本にしたいと過度に採集したり、生息環境である里山が少なくなったことにより各地で個体数が減少しています。そのため、絶滅のおそれのある動植物についてまとめたレッドデータブックに全国的に取り上げられています。このような種が、街の中であるにもかかわらず見られる足羽山は大変珍しい場所です。幸いにして福井県では生息地も多く、他県よりも個体数が安定していますが、保全についてみんなが考えていく必要があるのではないのでしょうか。



各都道府県のレッドデータブックでの指定状況を環境省のランクに換算して表示しました。

- 絶滅
- 絶滅危惧Ⅱ
- 要注目(もしくは希少)
- 絶滅危惧Ⅰ
- 準絶滅危惧

ギフチョウの分布

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月